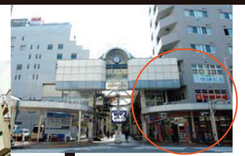
●銀冶小路の続きはここから
裏返して真ん中で折ってください

13 新津屋小路（にいつやこうじ）：新津屋小路堀という堀の両側に付けられた小路であった。新津屋小路は明治の町名改正で二番堀と改められた。堀は戦後になって埋立てられ、広い小路になった。

新津屋小路から新潟の町を見ておりますよ。どこで見ているか、探してくださいますかの。



甘泉の「新かた後の月見」に登場する旅館「あさたや 清六」も、新津屋小路にありました

江戸時代、旅籠町・古二之町、三之町（現在の古町通5・6番町）町には多くの旅人が訪れ、みなとまち新潟のもてなしを楽しみました。長谷川雪旦（はせがわせったん：1778～1843年、天保年間に完成した江戸の地誌「江戸名所図絵」の絵師）は、天保2（1831）年に奥羽から越後を旅し、その記録を『北国一覧写　出羽越後』にまとめました。雪旦は、自身がもてなしを受けた「海老屋」という旅籠で部屋のようすや料理、芸妓のことなど細かくスケッチを残しています。また、「海老屋」の向かいに會津八一の生家「會津屋」があったことも雪旦の絵から知ることができます。

『北国一覧写　出羽越後』

もてなしの町からエンタメの町へ

古町通5～7番町

古町通5番町「松竹館」（新潟名所絵はがき）

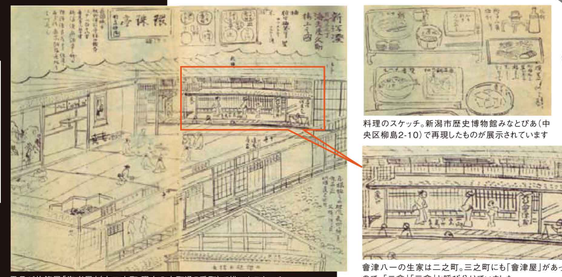
古町通9番町「大竹座」（新潟名所絵はがき）

明治時代、こんぴら通り（中央区西堀島町）に「永楽座」という常設劇場ができたのを皮切りに、古町通にも数多くの劇場ができて盛んに芝居公演が行われました。大正時代に活動写真がはじまると劇場は活動写真館へ姿をかえ、昭和の映画全盛時代には、古町通4番町の「昭和館」、5番町の「松竹館」、6番町の「電気館」、8番町の「大竹座」、9番町の「大勝座」と、番町ごとに映画館が並ぶエンターテイメントの一大発信地となります。モダンな外観の商店も増え、一帯は北陸有数の繁華街となりました。古町周辺に喫茶店が多いのはカフェの名残でもあるでしょう。

戦後、テレビの台頭により映画館は次々となくなり町のようすも変わりましたが、新たにできた「古町演芸場」や、毎回大勢の人で賑わう「ジャズストリート」「食の陣」「古町どんどん」などが開かれる古町の中心として、今も親しまれています。

上：右側の赤屋根の双塔の建物が「電気館」（新潟名所絵はがき）
下：同じ位置から見た現在の古町通6番町

「大新潟の銀座街古町十字路」（新潟名所絵はがき）

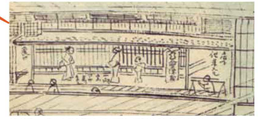


雪旦が旅籠屋「海老屋」（古二之町：現在の古町通5番町）で描いたスケッチ。窓の向こうの「會津屋」が會津八一の生家です

雪旦が描いた新潟芸妓。髪型、着物のことなどもメモしています（左）
現在の新潟芸妓（上）

「古町演芸場」は、昔「電気館」が建っていた場所の向かいにあるんですな。隣は昭和21（1946）年創業の喫茶店「白十字」でございますよ。

料理のスケッチ。新潟市歴史博物館みなとぴあ（中央区柳島2-10）で再現したものが展示されています



會津八一の生家は二之町。三之町にも「會津屋」があったので、「二會」「三會」と呼び分けていました

現在は會津八一生誕地の碑が建っています

そして今はマンガストリートなのだ!

屋根の上から町を見守る弘法大師さまと、NEXT21のツーショット!

柾谷小路今昔。かつては市役所と警察署がありました

私も近くにいるから、探してね。

17 新堀（しんぼり）：初めは道心小路という小路であったが、そこに新堀が掘り割られ、その両側が小路になった。新堀は明治の町名改正で三番堀と改められたが、堀は戦後になって埋立てられ広い小路になった。

15 柾谷小路（まさやこうじ）：江戸時代、本町通とこの小路の角に柾屋四郎右衛門の屋敷があったので、この名になったと思われる。上大川前通と西堀の間の小路であったが、明治末に蔦屋、延長された。現在は延長された道も柾谷小路と呼ばれている。明治の町名改正では、横三番町通と改められている。

古町花街は柳とツバメがよく似合うスイッ!

新潟の花柳界と開港浪漫

古町通8～9番町

老舗割烹や料亭も残る路地は昼と夜では全く雰囲気も違います。歩くといろいろな発見があるはず

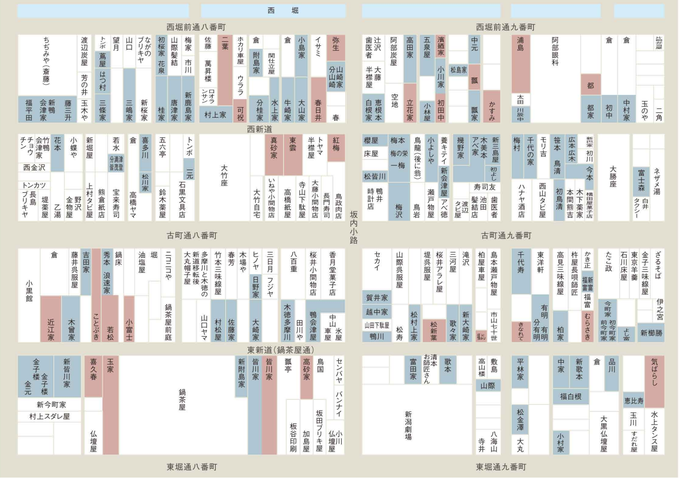
「二・三（古町通5・6）小粋で五・六（同8・9）全盛」と江戸時代から歌われた新潟の花街。8・9番町は5・6番町とは趣が違い、料亭や待合い、そして京の祇園に匹敵すると全国に知られた古町芸妓がいる置屋が数多くありました。芸妓は幼い頃から置屋の養女となって修行につとめ、美しさとともに、芸の素晴らしさでぬきんでていたといいます。そんな誇り高い芸妓が通った西新道・東新道周辺は、長い年月を過ごしてきた町屋やもてなしの心を感じさせるしっついなど、魅力的なシーンで満ちています。

19 坂内小路（ばんないこうじ）：江戸時代、本町通のこの小路の上手に坂内利兵衛の屋敷、下手に利兵衛の外屋敷があったので、坂内小路と呼ばれたと思われる。明治の町名改正では、横四番町通に改められた。

明治7（1874）年、フランス曲馬団の料理人ピエトロ・ミリオーレは、けがを負ってひとり新潟に取り残されますが、文明開化を推進する県令・楠本正隆や竹山病院初代院長竹山屯（たむろ）の協力を得て、東中通で肉屋を開業します。明治13（1880）年にこの店は大火で焼失しますが、翌年、本格西洋料理店「イタリア軒」を現在地で開業。瀟洒な洋館と料理の味は、新潟の鹿鳴館と呼ばれ人気を呼んだといいます。

ピエトロ・ミリオーレ

●六軒小路に続く



『新潟市三業組合組合員名簿（昭和5年）』（新潟市郷土資料館所蔵）をもとに藤村誠さん、高橋久子さんが作成したもの